

### <文献紹介>山寄謹哉・金井年編：新版『暮らしの地理学』

千葉, 晃

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

58

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2006-03-22

## 【文献紹介】

山崎謹哉・金井年編（2004）：新版『暮らしの地理学』  
古今書院刊 150頁 2,300円

本書は、山崎謹哉先生を筆頭とし10名の著者で書かれ、古今書院より2004年秋に刊行された。新版「暮らしの地理学」というタイトル通り、普段何気なく過ごしていると全く気づかない、生活に密着した地理学の話題を中心に全10章で構成されている。新版ということなので、国会図書館の蔵書検索で調べてみたところ、新版ではない「暮らしの地理学」は1986年に刊行されていた。約20年ぶりの改版ということになる。新版執筆者の誕生年を見てみると、1920年代1名、1930年代1名、1940年代3名、1950年代4名、1960年代1名となっている。あえて区別をするならば、人文地理学出身の先生の記述が多い。執筆者の年齢層は幅広いものの平均年齢が高いため、全体としてはやや大人しい印象を受ける。説明のため外国地誌の例に触れている章もあれば、一つのテーマを詳述している章もあり、バラエティーに富んでいる。地理学の専門用語も随所で使用されているので、一般の読者にはやや難しい気もする。読破するためにはある程度、地理学的な知識が必要であろう。

全体では、以下に示すような「暮らし」・「生活」に注目した章立てになっている。ここで各10章のタイトルを紹介する。I. 地理学の理解、II. 暮らしを囲む自然、III. 山地地域の暮らし、IV. 歴史的都市の機能と生活、V. 都市開発と景観、VI. 人口分布と地域的類型、VII. 行政と生活、VIII. 暮らしに見る風土景観、IX. 暮らしの中の食生活、X. 生活と余暇。

評者が新しい知見を得た章を、三つご紹介させて頂きたい。まずIII章の「山地地域の暮らし」に注目する。ここでは九州の山地地域の過疎化の問題を取り上げ、生活に必要な金額という点に関して具体的な数値を提示しながらその原因を探っている。過疎化は東日本よりも西日本のほうが遅く進行していたこと、山地地域での平均的な家庭の年間生活費は最低でも300万円程度かかること、などの記述が評者にとって新鮮であった。また、過疎地に定住するかそれとも離村するかという分かれ目は、収入の多寡で決定されるとある。具体的な方策は思いつかないが、逆に考えると過疎地を活性化させるためには給与を上げればよいのであろうか。

続いてV章「都市開発と景観」に触れる。この章では、都市空間と

その景観について扱われている。都市の成長というと、教科書的な同心円、扇形、多核心の各モデルが思い浮かぶ。しかしながらここでは、著者オリジナルの「都市の平面的成長と立体的成長」という図がインパクトをもたらしている。さらに著者は、この立体的成長について「近代期の建築技術の向上」に依存していると言及している。ここでも逆説的に考えてみると、建築学の進歩がなければ集住もできず都市も成長しえないことになる。加えて著者は、地理学で取り扱う景観は「見える」もので、都市工学での景観は「見せる」ものを扱うと指摘しており、後者の視点の欠如が地理学の弱点であるとも言っている。

本章の後半部分では、山形の城下町を例として景観論と景観計画論を展開している。その中で「わが国の都市は、都城建設の時代から周囲の山々を選地の基準とし、それらをランドマークとすることによって自らの位置を認識してきた。」とある。確かに日本中の多くの都市（城を中心に形成されたケースが多いだろう）では、必ず山が見える。見えないのは唯一、東京だけであると評者は考えている。

VII章は「行政と生活」である。「学区と地域社会」という節が興味深い。学区（西日本では校区という言い方をする）とは一体何なのだろう。という考えを改めて持つきっかけとなった。本章では、阪神大震災の時に小学校が避難所としての役割を持ったという内容が取り扱われている。近年の中越地震をはじめとした自然災害では、小学校に避難するケースが多い。本書中では「学校は教育施設であって避難所としての役割は本来の機能ではない」と指摘されている。この章にある、言わば「小学校の地理学」は、考えてもいないことだった。

さて、最後に本書の長所を一つ挙げるならば、それぞれの参考文献リストにあると言ってもよい。そこにはなかなか入手できない、あるいは気づきにくい論文が多く見つかる。公になっていない論文や報告が文献としてリストアップされていることは、短所ではない。このように引用・紹介することによってスポットライトが当たるものである。

（千葉 晃）